PB-6

トルコ語の伝聞の接語=*(y)mIş* が持つ時制について

網谷　晃樹

（東京外国語大学大学院博士前期課程）

要旨

トルコ語の接語=*(y)mIş* は話者が伝聞した事象について語る場合などに用いられるが、その内容が過去の事象であれ非過去の事象であれ、同一の述語が用いられる。これはトルコ語の定の述語としては例外的な現象であるが、そのメカニズムについて分析した研究は管見の限り見当たらない。本発表では第一に、接語=*(y)mIş* がつく述語の時制が曖昧に見えるメカニズムについて、間接性と時制の意味の構造から分析する。そして、接語=*(y)mIş* が生起する述語はトピック時間と発話時点の関係によって定義される時制の要件を満たせないために、時制が曖昧に見えることを示す。第二に、接辞-*mIş* によって現れる間接過去の意味を接語=*(y)mIş* の意味と比較し、前者の伝聞の意味は語用論的推論によって現れるものだと主張する。

1. はじめに・問題提起

トルコ語において話者が伝聞した事象について語る場合などに用いられる接語=*(y)mIş* は、時制が曖昧に見える。(1)は、話者が「アイシェの母の体調が良くない」ことを第三者から聞いて発話する場合にも、「アイシェの母の体調が良くなかった」ことを聞いて発話する場合にも用いることができる。

(1) Ayşe'-nin　anne-si　biraz　rahatsız=mış.
　A.-GEN　mother-POSS.3　a.litte　unwell=EV.COP
　「アイシェの母は少し体調が悪いらしい／悪かったらしい」

（Göksel & Kerslake 2005: 356）

(1)が使用される場面において、時制の解釈は副詞句や文脈に依存し、述語の形式からは判断することができない。例えば(2)のように、副詞句 *o gün*「あの日」を用いることで、時間の解釈を一意に定めることができる。この際も述語 *rahatsız=mış*（unwell=EV.COP）は(1)と同じものを使用する。

(2) O　gün　Ayşe-'nin　anne-si　biraz　rahatsız=mış.
　that　day　A.-GEN　mother-POSS.3　a.little　unwell=EV.COP
　「あの日、アイシェのお母さんは少し体調が悪かったらしい」

（Göksel & Kerslake 2005: 357）

トルコ語では、事象の起こる時間に関わらず同一の述語が用いられるような例は少ない[1]。接語=*(y)mIş* が生起する述語の時制が曖昧に見えるメカニズムの研究は、管見の限りでは見当たらない。Aksu-Koç &

1 =*(y)mIş* の他に、反実仮想の文でも時制が曖昧になる。

Slobin (1982)は、接語=*(y)mIş* はどのような時制・アスペクトを持つ形式とも共起が可能であると述べる[2]（Aksu-Koç & Slobin 1982: 193）。また Göksel & Kerslake (2005)は、接語=*(y)mIş* が時制を曖昧にしている理由として、一つの述語にコピュラ由来の接語[3]が複数生起できない[4]ことを挙げている（Göksel & Kerslake 2005: 356）。

本発表では、Johanson (2006)によるトルコ語の間接性の研究と Klein (1994)による通言語的な時制の定義を用いてこの現象のメカニズムを議論し、接語=*(y)mIş* が持つ述語は意味の構造上絶対時制が定義できないために、形式から時間が区別できなくなっていると主張する。また、間接過去を表すことができる接辞-*mIş* の伝聞の意味は、語用論的推論によって派生するものであり、接語=*(y)mIş* が持つ伝聞の意味とは構造が異なると分析する。

本発表の構成は以下のとおりである。第２節で間接性の意味と時制の定義に関する先行研究をまとめる。これらの先行研究を用いて第３節ではトルコ語の接語=*(y)mIş* が持つ述語の意味を分析し、接辞-*mIş* の意味と構造を比較する。第４節では、まとめと今後の課題を述べる。なお、本発表における例文番号・グロス・和訳は発表者によるものである。また、例文以外の部分において、大文字は子音同化や母音交替がある文字の代表形であることを表し、カッコ内の文字は脱落が起こる文字であることを表す。

2. 先行研究

第３節での分析に用いる先行研究を挙げる。第１項では間接性の意味について Johanson (2006)を、第２項では時制の定義について Klein (1994)をまとめる。

2.1. 間接性の意味：Johanson (2006)

Johanson (2006)は、間接性を示す文は「述べられた事象が受容者に認知されたことを述べる」ことが特徴であるとし、これを「二層構造の情報」と呼んだ。トルコ語では接語=*(y)mIş* と接辞-*mIş*（第３節で後述）が二層構造の情報を示す形式であると分析している（発表者は第３節で、接辞-*mIş* は二層構造の情報を示す形式ではないと主張する）。(3)は、話者が「大臣が病気である」情報を第三者から聞いた際に用いられる。

(3) Bakan hasta=ymış.
minister sick=EV.COP
「大臣は病気らしい」

（Johanson 2006: 76）

話者が直接情報を入手した場合にも、接語=*(y)mIş* が用いられる場合がある。(4)は、話者がアリの演奏を聴いている際の発話である。

2 ただし、直接経験を表す接辞-*DI* と接語=*(y)mIş* は規範的には共起しない。
3 接語=*(y)mIş* は通時的にコピュラ *ār*-に接辞-*miš* が後続したものと分析できる。過去時制を表すことができるコピュラ由来の接語に=*(y)DI* があるが、これは=*(y)mIş* と共起することができない。
4 ただし、条件を表すコピュラ由来の接語=*(y)sA* は、接語=*(y)mIş* や接語=*(y)DI* と共起が可能である。

(4) Ali iyi çal-ıyor=muş.

A. good play-IPFV=EV.COP

「アリは上手に演奏するなあ」

（Johanson 2006: 77）

2.2. 時制の定義：Klein (1994)

Klein (1994)は、話者が発話をする時点を「発話時点 TU」、命題内容が真であることを話者が保証する時間の幅を「トピック時間 TT」、事象が起こっている時間の幅を「状況時間 TSit」と呼び、時制を TU と TT の関係によって定義した（Klein 1994: 6）。現在時制は TT が TU を含んでおり、過去時制は TT が TU に先行する。

3. 分析

第２節でまとめた先行研究に基づいて、第１項では接語=*(y)mIş* の意味の構造を分析し、第２項では間接性を表すことができる接辞-*mIş* の意味の構造を分析した上で、両者の相違を示す。

3.1. =*(y)mIş* の意味の構造

まずは、比較のために=*(y)mIş* が用いられていない文を Klein (1994)に基づいて分析する。(5)では、過去時制を表す接語=*(y)DI* が生起している。接語=*(y)DI* は、話者が直接経験した過去の事象について語る際に使用される。

(5) O gün Ayşe-'nin anne-si biraz rahatsız=dı.

that day A.-GEN mother-POSS.3 a.little sick=PST.COP

「あの日、アイシェのお母さんは少し体調が悪かった」

（Göksel & Kerslake 2005: 357）

(5)の時制を図で表すと、図１のようになる。過去時制を表す接語=*(y)DI* によって、TT が TU に先行する関係であることが示されている。副詞句 *o gün*「あの日」は TT を修飾するため、TT は「あの日」である。以下、図中で時間は軸――に沿って左から右に流れるものとする。[TT]は TT の幅を、TSit/////は TSit の幅を表す。

図１：過去時制

――――――――――――TSit/////////////////[TT/////////////////]/////////////////――――――――――――TU――――――――――――

次に、接語=*(y)mIş* が用いられる文を分析する。第三者による(5)の発話を聞いた話者が、別の人物にその内容を語るとき、発話は(6)のようになる。接語=*(y)DI* と=*(y)mIş* は共起できないため、=*(y)DI* は使用されない。

(6)[=(2)] O gün Ayşe-'nin anne-si biraz rahatsız=mış.

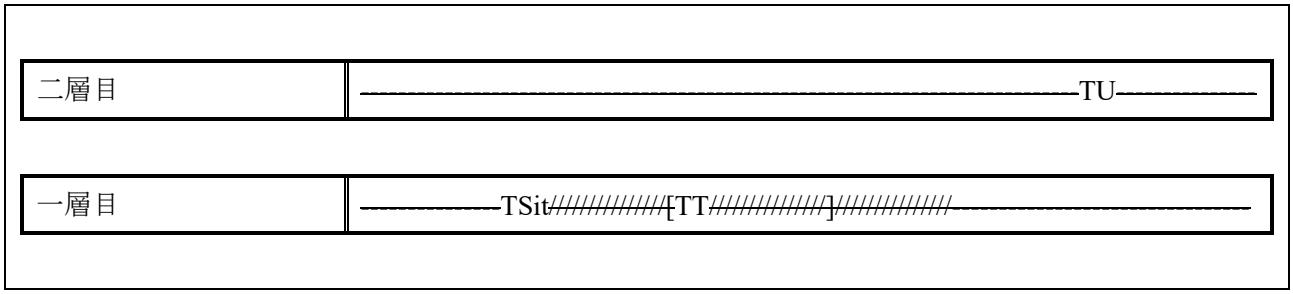
that day A.-GEN mother-POSS.3 a.little sick=EV.COP

「あの日、アイシェのお母さんは少し体調が悪かったらしい」

（Göksel & Kerslake 2005: 357）

(6)の時制を、Johanson (2006)と Klein (1994)を用いて分析する。Johanson (2006)の主張を用いて(6)を表すと、一層目の情報は「あの日、アイシェのお母さんは少し体調が悪かった」、二層目の情報は「話者が一層目の内容を認知する」となる。一層目は情報源の層、二層目は話者の層と言い換えることができる。次に、各層の内容を Klein (1994)の時制の定義に基づいて分析する。一層目の命題内容は(5)と同一であるため、(5)と同様に副詞句 *o gün*「あの日」が TT を修飾する。一方、TU は二層目に現れると分析する。これは、話者が一層目の内容を、認知を通して発話する時点を表す。このことは、図２のように表せる。

図 2：二層構造の情報と時間



このとき、副詞句 *o gün*「あの日」は一層目の TT の制限部として機能するのであり、二層目にある話者が認知する時間を表すものではない。(6)では、「アイシェのお母さんが少し体調が悪かった」のが「あの日」だったのであり、「らしい」のが「あの日」だったわけではない。そのため、TT は TSit と関連を持つことができる一層目に配置される。ここから、TT と TU が異なる層にあるため、前後関係や包含関係を持つことができず、第２節第２項で示した時制の要件を満たすことができないと言える。ゆえに、時制は曖昧なままとなる。例えば、(6)で過去時制を表現しようとしても、それは不可能である。(6)では TT と TU が異なる層にあるために、過去時制の要件である TT が TU に先行する関係を持つことができないためである。

なお、話者は発話時点において、一層目の命題が真であることに対して貢献する必要がある。Yavaş (1980)は、伝聞した内容を疑念を表明する文で取り消しできないことを指摘する（Yavaş 1980: 42）。(7)は、話者がジョンが働いていることを信じていないため不適である。

(7) John çalış-ıyor=muş *ama ben inan-m-ıyor=um.

J. work-IPFV=EV.COP *but I believe-NEG-IPFV-1SG

「ジョンは働いているらしい／働いていたらしい*が、私は信じない」

（Yavaş 1980: 42）

ここから、話者が発話時点において一層目の内容を信じている、という意味で現在を示していると言える。このとき、二層目に位置付けられる TT が一層目の TT とは別に存在すれば、接語=*(y)mIş* は現在時制を持つと言うことができるが、さらなる研究が必要である。

3.2. 接辞-*mIş* との比較

接語=*(y)mIş* と同じく命題内容を話者が伝聞したことを表すことができる文法形式に、接辞-*mIş* がある。接辞-*mIş* は、終了した事象について、話者がその結果状態を見て、そこから出来事の内容を推し量る場合にも用いられる。(8)は、話者がケマルが来たことを伝聞した場合にも、ケマルのコートがかかっていることからケマルが来ていることを推量する場合にも用いることができる。

(8) Kemal gel-miş=Ø.
K. come-EV.PRF=PRS.COP
「ケマルが来たらしい」

（Aksu-Koç & Slobin 1982: 187）

接語=*(y)mIş* と同様、話者自身が出来事を認知した場合でも接辞-*mIş* が使用されることがある（Johanson 2006: 77）。(9)は、話者が話し相手の鼻から血が出ていることに気づいた際の発話である。

(9) Burn-un kana-mış=Ø.
nose-POSS.2SG bleed-EV.PRF=PRS.COP
「鼻から血が出てるよ」

（Johanson 2006: 76）

接辞-*mIş* が持つ時制・アスペクトの意味について、例えば Göksel & Kerslake (2005)は、過去時制・完結相を示すと記述する（Göksel & Kerslake 2005: 327）。一方、本発表では Kornfilt (1996)や Jendraschek (2011)が用いる、現在時制を示すゼロ接語=*Ø* の存在を定の位置において認める立場をとる（Kornfilt 1996: 97; Jendraschek 2011: 257）。定の述語においてゼロ接語=*Ø* が時制の意味を持つため、接辞-*mIş* は時制の意味を持たず、完了相の意味を持つと分析する。

(8)を Klein (1994)に従って分析すると、図 3 のようになる。現在時制を示すため、TT は TU を含む。TSit は「ケマルが来る」である。完了相は、TSit が TT に先行する関係として定義される（Klein 1994: 108）。

図 3：現在時制・完了相

```
----------TSit//////////////////----------[TT----------TU----------]----------
```

また、接辞-*mIş* が持つ間接性の意味については、接語=*(y)mIş* の場合と異なり語用論的に派生すると考える。Aksu-Koç (1995)は、接辞-*mIş* が示す間接過去の意味は、完了相が「現在の結果状態が必然的に

過去の完了した過程を示す」ことから拡張されたものであると述べる（Aksu-Koç 1995: 275-276）。実際、接辞-*mIş* は、形動詞として使用された場合やコピュラ由来の接語が後続した場合に間接性の意味を持たないことが知られている。例えば(10b)からは、「死んだらしい男」という読みは生まれない。

(10) a. Adam öl-müş=Ø.
man die-EV.PRF= PRS.COP
「男は死んだらしい」

b. öl-müş adam
die-PRF.PTCP man
「死んだ男」

（Aksu-Koç & Slobin 1982: 188）

Johanson (2006)は、接辞-*mIş* が接語=*(y)mIş* と同様に間接性の意味を持つことから、接辞-*mIş* も二層構造の情報を持っていると主張するが、本発表では、推量や伝聞の意味は語用論的推論によって生まれるとする立場から、接辞-*mIş* が表す情報は二層構造ではないと分析する。

接語=*(y)mIş* や接辞-*mIş* が使用される形式と意味を動詞 *gel-*「来る」を例にしてまとめると、表 1 のようになる。

表 1：トルコ語で伝聞を示す形式の例

形式	述語の例（一部）	グロス	和訳	二層構造の情報
=*(y)mIş*	*gel-iyor=muş*	come-IPFV=EV.COP	来つつあるらしい 来つつあったらしい	持つ
	gel-ecek=miş	come-PROS=EV.COP	来る予定らしい 来る予定だったらしい	持つ
-*mIş*	*gel-miş=Ø*	come-EV.PRF=PRS.COP	来たらしい	持たない

4. おわりに・今後の課題

本発表では、接語=*(y)mIş* が生起する述語の時制が曖昧に見える現象について、メカニズムを議論した。その中で、接語=*(y)mIş* が持つ意味の構造上、絶対時制が定義できないために、形式から時制が区別できなくなっていると結論づけた。また、間接過去を表すことができる接辞-*mIş* の間接性の意味は語用論的推論によって現れるものとまとめ、両者が表す伝聞の意味の構造が異なることを主張した。

今後の課題として、接語=*(y)mIş* の意味をより正確に記述するために、二層目が時制を持つかどうかを検討する必要がある。また、発言動詞を用いて伝聞内容を埋め込んだ文との比較を通して、意味の異同を明らかにすることも課題である。

略号

-形態素境界／=接語境界／1 一人称／3 三人称／COP コピュラ／EV 証拠性／GEN 属格／IPFV 未完結相／NEG 否定／PST 過去／POSS 所有／PRF 完了相／PROS 前望相／PRS 現在／SG 単数

参考文献

Aksu-Koç, A. (1995) "Some Connections between Aspect and Modality in Turkish". P. M. Bertinetto, V Bianchi, Ö. Dahl & M. Squartini (eds.) *Temporal reference, aspect and actionality: Typological perspectives.* Torino: Rosenberg and Sellier. pp.271-287.

Aksu-Koç, A. & Slobin, D. (1982) "Tense, Aspect, and Modality in the Use of Turkish Evidential". *Typological Studies in Language.* 1. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.185-200.

Göksel, A. & Kerslake, C. (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar.* London: Routledge.

Jendraschek, G. (2011) "A Fresh Look at the Tense-aspect System of Turkish". *Language Research.* 47(2). pp.245-270.

Johanson, L. (2006) "Indirective sentence types". *Turkic Languages.* 10(1). Wiesbaden: Harrassowitz Verlag. pp.73-89.

Klein, W. (1994) *Time in Language.* London: Routledge.

Kornfilt, J. (1996) "On Some Copular Clitics in Turkish". *ZAS Papers in Linguistics.* 6. Berlin: Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft. pp.96-114.

Yavaş, F. (1980) *On the Meaning of the Tense and Aspect Markers in Turkish.* Ph.D. thesis. Kansas: University of Kansas.